

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 130 号

平成 25 年 2 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

小西芳之助「ローマ人への手紙 講解説教」より（9）

第 25 講 義とせらるるの結果

復活の希望

復活の希望は、人間の知恵、努力によらず、真理の御霊によっています。救われているという証拠は、我々が復活の希望をもっているということです。我々がもし復活の希望を持っていないとすれば、救われていないことを意味します。同時にそれは信者ではないという証拠です。各自が自分の胸に手を当てて、深く考えてみる必要があります。キリストの霊、我にあれば、我は復活させてもらうという望みが与えられているし、また逆に、キリストの霊、真理の御霊が我々になかったら、我々には復活するという希望はない。この復活の希望を与えるために、パウロはこのロマ書を書いたのです。

キリスト教はこのためにあり、キリスト教のすべては「復活の希望」に懸かっています。ヨハネ伝 3 章 16 節には「それ神はその独子を給ふほどに世を愛し給えり。すべて、神を信じる者の滅びずして、永遠の生命を得ん為なり」とあります。「永遠の生命」とはこれです。復活する生命、これを永遠の生命という。諸君は、今はこれを信じなくても宜しい。真理の御霊が我々に降った時に信じさせてもらえますから。しかし、キリスト教というものは、こういうことを説く宗教であるということを、少なくともはっきりと知っておく必要があります。

(P.220)

第 26 講 アダムとキリスト (1)

聖句は信仰の根拠

聖句は我々の信仰の根拠であります。我々の経験、我々の信仰、我々の行いというようなものは、吹けば飛ぶようなもので、我々の確実な拠りどころは聖書の文句です。諸君！ 聖書の文句をおろそかにしてはなりません。

(P.225)

聖書の中心問題

要するに、この〔第5章〕11 - 13節においては、特に、罪と死の問題が論じられています。そして18節では、キリストの義が罪と死とを滅ぼして永遠の生命を与えるということが論じられています。すなわち、罪と死の問題、義と永遠の問題が論じられています。この問題が聖書の中心問題であります。

私は22年間、この教会のお陰で、強制的に、殆ど毎日聖書を読まされました。説教の準備のため、病気でない限り毎日聖書を読みました。そのお陰で、少しく聖書の意味が分かってきました。聖書の中心は、「罪と死、義と永遠の生命」、これが聖書の全部であるということが分かってきました。よい行いをするとか、立派なことをするとか、そういうことはセコンダリー（二義的）な問題です。運転手は、車を運転すること、これが第一義的なことです。死の問題、その反対の永生の問題、これが牧師の専門です。石館兄弟のような学徳信仰の高い兄弟でも、誰も葬式のことには頼みにこないでしょう。この教会の信者の葬式は、牧師小西に頼みます。

宜しいですか。牧師の専門は死の問題を取り扱うことにある。聖書というものは、「死と永世の問題」を取り扱っているのです。ヨハネ伝には、「イエスを神の子と信じて、永遠の生命が与えられるということを君等に知らせるために、ヨハネ伝を書いた」と明記してあります。ヨハネ伝の中心問題は永遠の生命にある。また、ロマ書の初めには、「私は君たちに会いたい、我々に与えられた霊の賜物を、少しでも君らに分け与えるために、私はあなたに会いたい」と書いてあります。パウロがここで言った霊の賜物とは、一言で言えば、永遠の生命です。永遠の生命を知らずして、キリスト教はありません。

福音というものは、この永遠の生命を与えることを言う。死に打ち勝つこと、これを福音という。死に打ち勝って初めて、我々に生の意義が分かってきます。キリスト降誕の意義は、我々に永遠不滅の生命を与えることにあります。それ以外にありません。それ以外のものはセカンダリーのものであります。(P.228)

第 27 講 アダムとキリスト (2)

律法は罪をはっきりさせる

律法がはいりこんできたのは、罪過の増し加わるためである。しかし、罪の増し加わったところには、恵みもますます満ちあふれた。
(ロマ書 5 章 20 節)

「...するなかれ」という十戒の律法が入ってきたら、その十戒のために我々の罪が増し加わるというのは、律法がなかったら、罪は死んでいる、すなわち、罪を犯しているということが分からないということです。十戒によって、我々に罪というものははっきりしてくるのであります。そして、律法に刺激されて、我々の罪が増える。これは不思議な現象です。道徳をいろいろ学ぶと、かえって不道徳となる。道徳を語る人に道徳的な人が少ないのは、律法が道徳を行なう力を与えない証拠です。

しかし、罪の増し加わるところには、恵みも満ち溢れた。贖いというものは罪を贖うのであるから、罪が重い程、恵みを多く味わうことができます。親鸞の言葉に「善人なおもて往生す。いはんや悪人をや」とあります。赦し、恵むという観点からは、罪が大きいほど効果が大きいということです。本当に効く薬であれば、罪病の重い方が有難いでしょう。従って、赦し、恵む力を無限に持ったキリストから見れば、罪の多い程効果をはっきりしてくると言う。これは誠に味わい深い言葉であります。我々は、初めのうちは自分が罪人だとは思っておりません。しかし、だんだん聖書を学んでくると、自分がいかに罪人であり、神の意思に反しているかが分かってきます。最初は神の意思とか、罪とかに気付かないが、信仰生活を送っているうちに、いかにも自分は信仰がない、自分は何も分かっていない、自分は罪深いということが分かってくる。そうなると、いよいよ恵みをはっきりしてくるのであります。十字架の贖いが、はっきりしてくる。罪の増すところに、恵みもいやまして味わわれてくるのであります。

(P.233)

永遠の生命

罪、滅びの問題は、イエス・キリストの贖いによって解決され、我々は義とされて、永遠不滅の生命を頂くということです。度々申しますが、私はこの教会で 23 年間、聖書を強制的に読まされました。聖書を読めば読むほど、聖書の唯一の問題はこれに尽きることが分かってきます。ヨハネは、「ヨハネ伝を書いたのはイエスを神の子と信じるため、イエスを神の子と信じる者には、永遠の生命が与えられるということを言わんがためである」と言っています。ヨハネ伝のみならず、どの書を読んでも、まじめに読めば読む程、救いということが中心問題になっていることが分かります。

この永遠の生命は、人類の持つ最大最善の宝であります。これに勝る宝はありません。人間の能力、人間の行動、人間の思想、そのようなものは、この永遠の生命に比べれば、吹けば飛ぶようなものです。この永遠の生命を我々のものとすることができたならば、人生において解き得ない問題はなくなります。諸君！ 実験しようではありませんか。パウロはこれを実験して見せてくれました。

(P.235)

第 28 講 潔めらるること (1)

信仰を生かすも殺すも、日々の行ない

ロマ書第 5 章までに、贖罪の信仰をいかに信ずるか、いかに受けるかについて学びました。すなわち、ロマ書 3 章 23, 24 節を信ずること、受けることであります。これは、きわめて大切なことではありますが、また極めて難しい、難信の法であります。クリスチャンが非常に少ないのはこのためであります。この信仰は、人間の理性、人間の知恵をもってしては分からない。度々言う通り、我々はこの信仰でいつもひっかかっている。そうですから、パウロは初めの 5 章をついやして、このロマ書、3 章 23, 24 節を説明したのであります。いかにこれが重大であるかが分かります。滅びか、あるいは救いか、我々の人生が 70 年で終るか、永遠にまで延びるか、という決め手はこの 2 節にかかっています。諸君! これを信じましたか。われわれが「mortal」か、「immortal」かは、これで決まる。これが分かったら入信と言えるのであります。5 章までは、この入信の問題でしたが、本日から入ります 6, 7 章は、この贖罪の信仰をどのようにして継続して行くか、信仰の継続の問題であります。すなわち、いよいよ「行い」、信仰と行ないとの関係に入ります。

人間の信仰は、いつも我々の煩惱、妄念によって乱されています。パウロ先生でも、「我は罪人のかしらなり」と言われました。常に信仰が汚されています。そうですから、信仰を継続するのに、我々の日々の行ないが問題となってくる。宗教で大切なことは「信仰」と「行い」です。我々の信仰が、少しも進歩しない、あるかなきかのごとくであるのは、信者の信仰が頭だけであって、身体全体に移って来ないのは、すなわち、この「行い」がないからであります。実行によって、日々の行ないによって、我々の信仰が生きるか死ぬかが決まります。信仰を生かすも殺すも、我々の日々の行ない、実行にある。ボヤボヤ生きているだけでは、10 年経っても 20 年経っても、信仰は成長しません。

(P.237)

狭き門より入れ

神の意思に従うとはどういうことか。具体的には、目の前にある義務を為すことです。自分の考えではなしに、神の意思に従って。ルッターの言葉で言えば、「新しき服従」です。諸君は「服従」という言葉は嫌いでしょう。しかし、この「服従」という言葉、これが永生に通ずる言葉であります。

私の同志会時代の友人に橋本耕三という人がおりました。八高から来て、独法科を出てドイツ語が達者な男でしたが、彼がドイツ語の聖書を私にくれました。その聖書の扉に、「狭き門より入れ」とドイツ語で書いてありました。残念ながらその聖書をなくしてしまいましたが、彼のその言葉が今でも私の心に刻み込まれています。

諸君！ キリスト教徒の生涯は狭き門です。服従の生涯です。神の意思に従うの生涯であります。言葉を換えて言えば、自分が快いから、自分が幸福だから、自分が楽しいから生きるというのではない。目の前に置かれた義務を行なう。カーライルの言葉で言えば、「Do thy duty that lies nearest thee.」となる。

人生というものは、フラフラとした生涯ではありません。人生は真剣勝負。服従の生涯、神の意思に従うの生涯であります。この頃は、レジャーという言葉が流行していますが、そういう人間は滅びの人間です。そんなものを真似する必要はない。キリスト教信仰は狭き門です。この信仰は難しい。これに入る人は稀であります。いわんや、これを続けることは、もっと難しい。

(P.241)

平凡な義務程尊い

だから、あなたがたの死ぬべき身体を罪の支配に委ねて、その情欲に従わせることをせず、また、あなたがたの肢体を不義の武器として罪にささげてはならない。むしろ、死人の中から行かされたものとして、自分自身を神ささげ、自分の肢体を義の武器として神にささげるがよい。（ロマ書 6 章 12, 13 節）

献身の行です。「捧げよ」、これを簡単に言えば、神に捧げよ、肢体を義の武器として神に捧げよ、不義の武器として罪に捧げないで。具体的のどうしたらよいかと言うと、自分の目の前に置かれた義務を為せ、ということです。自分の義務から逃れてはいけません。自分の目の前に置かれたどんな小さな義務でも、それを大胆に行うということです。それが神の意思に従うことになる。イエスは 30 歳まで大工をしておられた。大工という目の前の義務をなされた。我々も少なくとも 30 年間は自分の義務に対してつぶやいたらいけません。平凡な義務程尊いのです。

(P.243)

永遠の生命は、神の賜物、イエスの贖罪によって頂く

我々は、何かの僕であります。自分の僕であるか、贖罪の僕であるか、どちらかです。自分の考えに従っていることを「疑い」と言い、贖罪の真理に従うことを「信仰」と言います。我々はこのどちらかに従わねばならない。自分を主人とする時は、口で善行をしていると言いながら、実は、自分の好きなことをしている。しかし、キリストの弟子になったら、我々はしなければならないことをする。自分のしたいことをするか、なすべきことをするか、これで決まります。

潔められるということは、宗派によって随分違います。心の状態がきよいとか、きよくないとかを議論するのはよくない。むしろ、問題は「行い」であります。心はきよくなくてもよい。なすべきことをなす。心は変わり易い。重要なことは行いであります。何をやっているのかが大切であります。なすべきことは神が教えてくれます。しかも、永遠の生命は、なすべきことをなしたことによって得るものではなく、神の賜物として、イエスの贖罪により頂くものである。我々のなすことは小さなものです。よく「海老で鯛を釣る」と言いますが、我々の小さな行ないで永遠の生命を頂けるなどという考えは贅沢です。重ねて言いますが、自分の称名、献身によって永遠の生命を勝ち取るのではありません。神の賜物として、イエスの贖罪によって頂くのであります。

諸君！ なすべきことをなすの力を神よりいただき、分相応にこれを実行しようではありませんか。

(P.250)

By always thinking unto it

潔めらるる生活、信者の生活というものは、入信した贖罪の信仰の繰り返しであります。アイザック・ニュートン卿がどのようにして万有引力を発見したのかと聞かれたとき、「by always thinking unto it」(常にそれを思うことによって)と答えたと言われます。これは万有引力の発見に限らず、我々が新しい真理を身に付けるためには「常にそれを思う」必要がある。贖いの信仰も同じです。我々にとって新しき真理ですから、自分のものにするにはどうしても常に思う必要がある。そして贖罪の信仰を継続することは、信者の生活が生きるか死ぬかの問題であります。度々申し上げる通り、多くの信者が未信者に劣った生活をしているのは、この継続、潔められることに対して、全然無関心であるがためであります。

(P.252)

目の前に置かれた義務を尽くせ

あなた方は、...今や自分の肢体を義の僕としてささげて、きよく
ならねばならない。(ロマ書 6章 19節)

ヨハネ伝の終わりで、イエスはペテロに対して「我に従え。若い時には、君は勝手に自分の好きな道を歩いていたが、ついには自分の行きたくない所へ連れて行かれるぞ」と言われた。これは「お前は殉教するぞ」という意味ですが、自分の好きな所でなく、引きずりまわされて、自分の命ぜられた、なすべきことをやらされる生涯、これがクリスチャンの生涯であります。そして、これはクリスチャンの生涯だけではないでしょう。本当の人間というものは、私はそのような生涯になるのだろうと思う。自分の好きなことをせず、自分がやるべき責任を果たしていく、というのが本当の人間の姿でしょう。そこに本当の喜びと自由があるのだろうと思います。パウロが 15 23 節に述べている奴隷の意味は、君たちは今までは自分の奴隷だったが、この贖いの信仰に入ってから、贖い主キリストの奴隷である、だから自分の肢体を義の僕として捧げよ、キリストの意思に従え、という 19 節、これが本日の中心であります。19 節を簡単に言えば、「我々は日常、自分の目の前に置かれた義務を尽くせ」ということです。

私は、内村先生がお好きでしたカーライルの言葉を思い出します。「Do thy duty that lies nearest thee, that thou knowest to be thy duty.」(汝の最も近き義務を尽くせ、汝が義務と知っているその義務を尽くせ)。これがすなわち、19 節の精神だと思います。誰でもできることです。最も尊い善というものは、誰にでもできる。しかし、誰にでもできるということは、易しいということと同意語ではありません。これは相当禪をしめ直してかかる必要があります。

(P.256)